

# 星宿海への道

母なる海……。

もしかしたら雅人は、

星宿海という

古来から多くの伝説を

生みつづけてきた場所に、

自分の母親を見ていたのでは

なかったのか……。



2002年 幻冬舎

## 「Story

昭和30年頃、大正区にある名のない橋の下で生活している母と子がいた。その母親の死後、瀬戸家の養子として引き取られた息子 雅人は、中学を卒業した後玩具メーカーの営業マンとして働いていたが、50歳のときに旅先で訪れた中国・タクラマカン砂漠近郊の村で失踪した。雅人が姿を消した理由とは――。血のつながらない弟 紀代志と、雅人の恋人 樋口千春は、失踪の真相を探すうちに、少年期から雅人が憧れていた黄河源流にある「星宿海」と、彼にとっての「星宿海」の意味を見出していく。

## 宮本輝氏とシルクロード

作中で、雅人が旅先で訪れ失踪する中国とパキスタンの国境近くの地域は、宮本輝氏自身も1995年に訪れている。そのシルクロード6,700キロ、40日間にわたる旅の紀行エッセイが『ひとたびはボプラに臥す』（1997～2000年、講談社）であり、現地の臨場感あふれる風景や旅で感じたことは、本作品をはじめ、『草原の椅子』（1999年、毎日新聞社）や『三千枚の金貨』（2010年、光文社）など、さまざまな作品に散りばめられている。



## 母と自分の故郷を探して

読み進めていくうちに明らかになる雅人が「星宿海」に執着していた理由。物語の端々で登場するその理由を目にする度に「雅人はどこかで生きている」と感じるのは、私だけでよいはずです。

Review